

ドイツ系ユダヤ人の自伝文学 2

克服されない過去・留保

西谷 頼子

本稿は、「1 女性の証言—過去の清算・決別」「2 男性の証言—デアスポラ・流離の年月」と題した「ドイツ系ユダヤ人の自伝文学 1」の続編である。今回は第二次世界大戦以後、ホロコースト体験者と次世代のドイツ系ユダヤ人の生きざまを取り扱い、統一ドイツ社会に浮上している問題点を摘出してみたい。そのため諸問題を文学によって解決の道を探求している3人の自伝を取り挙げる⁽¹⁶⁾。さらに著名なドイツ人作家と当時のドイツ・ユダヤ人中央評議会会長の「負の遺産」についての論争から、ドイツ人とドイツ系ユダヤ人の意識および認識の相違を挙げて、「ドイツ系ユダヤ人の自伝文学1・2」のまとめとしたい。

3 克服されない過去・留保

旧西ドイツの場合、戦後、ユダヤ人はどのような生き方を強いられたのだろうか。ここで取挙げる対象的な2作品が具体的に問題を提示している。旧東ドイツの場合、当地に生まれたバーバラ・ホーニヒマンが、統一以前では決して知り得なかった東ドイツ国内に定住したユダヤ人の生き様を浮き彫りにしている。(本文中のカッコ内の数字は使用テキストの頁数。)

3-1 ローラ・ヴェイコウ『家の事は何も話せない・ドイツのユダヤ人物語』(1996)

50/60年代に大都市ミュンヘンで生活基盤を築くユダヤ人家族の日常性が伺われ、一人称で書かれた「生活記録集」には、当時の旧連邦共和国の内情が浮き彫りにされている。

「家庭と学校教育の矛盾」

ユダヤ人の両親は、収容所体験者であり、母方の祖父はガス室で殺害されている (149)。父はポーランド系東方ユダヤ人で、実名をドイツ系に改名し素性を極秘にし、経営者として成功を収める。母は娘に収容所体験を語り (184)、あらゆる不都合をこの体験に原因があるとし (196)、両親と同様に収容所体験者たちは、悪夢に悩まされ体調を崩している (204)。

両親のユダヤ人としての民族意識は、収容所体験者の友人が非ユダヤ人女性 Schickse と結婚することに対して、「なんとという恥じだ」(28)というほどに、純血尊重主義をとり、また作者である娘が河でおぼれそうになり、ドイツ人に救助されたときも、父は「ドイツ人が私の娘を助けたのだ。何という恥じだ」(74)とあからさまに本心を吐露している。このようにして両親はユダヤ人や強制収容所体験者たちと連帯意識を高めている(203)。

ユダヤ人社会の母系優先主義から、父は伝統的な母への尊敬の念を家庭内で娘たちに教授し(42)⁽¹⁷⁾、また犠牲者に祈りを捧げ、パサー祭 Pessach を家庭で習慣とし (118)、食事制限を行い (179) ながら、生活全体に従来の伝統を守るべき道として説く。

家庭内でのこのように伝統重視の生活について、表題にあるように、父は外部に「家の事は何も話してはいけない」(60/212)と語気を強め、「父と母の教えだけを守り、他は無視すること」(49)と説く。民族意識を高める言語について、両親は主人公の「私」に知られたくない事柄をイディッシュ語で話し (45)、「私」をヘブライ語の学校へ通わせる (53)。

宗教について、娘はギムナウジウムへユダヤ教の授業を聞きに行かされる。例えばユダヤ教とキリスト教の相違について質問したとき、母はイエスを受け入れられないという返答に、イエスはユダヤ人であるが、と基本的な疑問をもちながら (102)、「私」はユダヤ教へ傾倒し贖罪の日ヨム・キブルと新年がユダヤ人にとって最も重要なことだと確信を強める (104/106/143)。主人公はドイツ人への憎しみの感情を育てていき、母からはドイツ人に憎しみを抱いてはいけないと (133) 揶揄されるが、ユダヤ民族への露骨な軽蔑を経験したときは、家でダビデの星のネックレスに自分を慰めている (134)。

妹は生涯障害者のため、家族は安楽死を医者頼む。しかし「45年以前ならばこの白衣を着た医者は、妹をガス室へ送っていただろう。しかし今

日では医者倫理を誓うヒポクラテスを矛にする」(276)と純粋に歴史の矛盾を指摘する。父とこの妹は交通事故で逝き、その日が偶然にも6月17日で当時の「ドイツ統一の日」(273)であった⁽¹⁸⁾ことから、ドイツ社会との宿命的な結合について「私」は悲壮感に浸る。

戦後西ドイツ社会で生き抜くこの家族の生き様は、決して特殊なものではなく、外見上では伝統的な「同化主義」を取っているが、内面ではユダヤ人としての伝統を頑なに守り抜く姿勢である。

特に当時の学校教育のあり方が作者の経験から明白になっている。例えばバイエルン地方の宗教教育の実態がわかり、主人公は新教の小学校へ通い(25)、義務教育後半で、カトリック教とプロテスタントに分かれるが、ユダヤ人の子供は新教とされ(100)、さらには宗教の授業に参加しなくてよい(101)と言われ、主人公の書類には、国籍は「ドイツ」とあり、宗教は「イスラエル israelisch」と記され、ユダヤ人への「無関心さ」が伺われる。また第三帝国についての当時の授業内容を知ることができる。「アンネ・フランクの日記」、ヘブライ語の知識(131)、ユダヤ人を主題にした著名な映画『ヤコブと大佐 Jakowski und der Oberst』(132)、ワルシャワ・ゲットーの抵抗運動記念際を祝い記録映画(133)などから身につけた豊かな知識で第三帝国におけるポーランド支配の「人種迫害、嫌悪、殺害」について報告するが、教師に中断される(171)。「これはナチスの行為であり、(…)ドイツ人の少数派にすぎない。(…)ヒトラーは善行も施し、失業者を減少させ各人がフォルクスヴァーゲン車を買えた。大戦ではドイツ人も苦悩し、自身もロシアの捕虜となったと教師は語った。(…)私は報告発表で勇気づけられるかと思ったが、ナチスの正当性と擁護を聞くことになった」(174)と50/60年代の典型的な教師の言葉が記述されている。このような教育方針は、70年代から「過去の教育」について非難が顕著となり批判の対象となっている。

家庭内と外界の矛盾から、作者の心の葛藤にも当時のユダヤ人に対する軽蔑の念が反映する。「私はユダヤ人と聞くと汚されたもの *Beschmutzung*、品位を貶められたもの *Erniedrigung* という言葉が浮かぶが、誇る気持ちを持とうと努力している。頭を上げユダヤ人であることを恥じないように自己意識を植え付けようと自分を作っている。しかしユダヤ人とはぼろをまとい胸に黄色の星を付けているイメージだ」(227)。

さて自伝文学を研究対象とし具体的に詳細に内容を示す重要性は、従来

なら推測不可能な人間の喜怒哀楽と言った感情のひだを読み取ることである。この家族の個人史から、ユダヤ人たちが戦後西ドイツ社会を離反しなければ精神的安定を得られなかった実状が伺われる。父と妹の死後(276)、主人公はカナダからアメリカ合衆国へ、母は再婚してベルギーで生活する(276)という、2千年におよぶ迫害からユダヤ人の宿命とされた「ディアスポラ」の歴史の一コマがここにも描写されている。

文学的手法として、作者は時代背景から記憶を呼び戻し、また家族間で強烈に印象に残ったことを回想し、事実として確証している。前記のルート・クリューガーのように、体験を重ねた大人の女性の視点で過去を振りかえるという手法ではなく、成長過程に適合させた感情を表現し手紙などを織込み「小説」、「物語」として自己の記録を作者は残している。

3-2 ハンス・フランケンタール『帰国拒否・ユダヤ人殺害後の経験』(1999)

表題が示すようにフランケンタールの帰郷は歓迎されてはいない。西ドイツの中心地ノルトラインヴェストファーレン州に属し、現在約2万5千人が住む集落シュマレンベルク/ザウワーラントが作者の故郷である。この伝記は、地方小都市へのユダヤ人家族の移住から、強制労働、連行された強制収容所の実態と救助までが綴られている第1章と戦後のドイツ社会でユダヤ人として生きる確証を勝ち得た第2章から成る。強制収容所を体験したユダヤ人たちのほとんどがそうであるように、作者も40年を経て初めて自分史を語ることができたという(95)。

「前史」

17世紀末期からユダヤ人たちがこの地に定住し始め、作者の祖父は1880年に移住し、ユダヤ人の伝統的な職業である家畜商を営み始めた過程が描かれ、一般的なユダヤ人のドイツ定住の様相を知ることができる。

カトリック系のこの町は、32年にはハンスの小学校では「ユダヤ人の子供と遊んでもよいが、ルター派の子供とは遊んではいけない」と言われて(22)、宗教的差別のほうが人種差別より強いことが証明されている。しかし33年のヒトラー政権獲得、35年のニュルンベルク人種法施行により国

内での「アーリア人化」と38年の「ポグロム」を迎え、ユダヤ人の6才から13才の子供はすべて保護観察の対象となり、12歳のハンスも例外ではなかった(30)。39年からのユダヤ人の就業禁止により、16才以上の者には強制労働が義務付けられており、兄弟は二年間道路工事人夫となり(39)、43年3月にすでに逮捕されていた父母が居るアウシュヴィッツ・モノヴィッツ強制収容所へ連行され、ドイツ有数のI.G. 塗料ブーナ合成ゴム工場で強制労働につく。強制収容所で両親を失った事実、ドイツ人監視者との友情関係により命拾いしたこと(54/61/68/79)、ユダヤ人のドイツ系とポーランド系の確執(56)、配給だけでは生き延びられないため、司令官の飼犬を殺害、食したこと(69)、外部との接触を試みた抵抗運動(72)と労働のサボタージュ(74)、歯科部の人体実験(76)などを、歴史の証言者として作者は語っている。

「克服されない過去・留保」

》曖昧な非ナチス化《

父の遺言どおりに(95)ハンスは兄とともに故郷へ帰還できたが、43年に国籍を剥奪されたので、住民登録から開始する(105)。兄は収容所の後遺症として肝臓病で93年に死亡。ハンスは父の職業であった畜産業から始めるが、両親の家には「半ユダヤ人」のいところが居住。ホロコーストについて住民たちは直接に質問せず、これは逆に差別になるからであろうと作者は善意に解釈するが(102)、他人事として傍観の姿勢が事実である。特に同世代間でこの話題は禁止事項となっていた(108)。旧ナチス党员や共鳴者たちは一致団結して「神を信じる者は、過去の忘却が必要」と嘘ぶく。多くの旧ナチス党员がキリスト教民主同盟(CDU)支持者という事実が存在するが、この党の施政に賛成できたとしてハンスも入党したと告白している(108)。しかし63年のフランクフルト裁判にこの兄弟も証人として出廷した(22)が、この裁判は結局、多数派による少数派への牽制とユダヤ人ハンスには映り、精神的安定を得ることはなかった。

ところが68年の学生運動の社会的変革から旧西ドイツ社会では、戦後保留された諸問題への関心が高まり、徐々にユダヤ人問題にも言及される。しかし「負の遺産」に直接言及されるまでにはさらに年月を重ねなければならない。ましてや個人への人権補償問題は完全に取り残されていく。

例えば 80 年代に、女子大生の 17 世紀から 33 年までのユダヤ個人史研究「特別行動 1933-43 年」のなかに、ハンスの叔母が監督官の誤認で強制収容所へ輸送された事実を作者は発見し (130)、新聞社に訴えるが反応がなく、当時から 20 年以上市長職に就くドイツ人も無関心を装う (134)。このような拱手傍観の姿勢はドイツ国内の市民生活全体に存在し、戦後から盛んに政策とされた「非ナチス化」(105) の実状を作者は炙り出している。

》補償問題《

父の職業への賠償金は不可能であったが、作者自身の「職業訓練の損失」に対して 5 千マルク (DM) の一時払いが、さらに法規改正により後年同額の 5 千 DM が支払われた。この額 1 万 DM だけが、「道路工事の強制労働・連行・失った青春・強制収容所での拘留・親類喪失・生涯における肉体的精神的後遺症」に対する国家賠償である (118)。またアウシュヴィッツ・モノヴィッツでの強制労働に対して I. G. 塗料ブーナ合成ゴム企業から 50 年代に 5 千 DM が支払われている (147)。

両親の不動産は、「ポグロム」事件以後ユダヤ人所有財産が強制的に売買されるなか売却されている。当時これは 1 万 3 千ライヒスマルク (RD) だが、売却金は一度に受け取れずそのうち 5 千 RD はゲシュタポの管理下で、そこから毎月父は 250 RD を受けとることとなった。残高 8 千 RD は、「ポグロム」に対しての損害賠償として没収されている。つまり「ポグロム」はユダヤ民族の罪業に対する必然的な法的制裁と第三帝国側は決定し、その賠償をユダヤ人自身が支払う義務を担うとされたのである (33)。ハンスの手に両親の不動産が返却されたのは、60 年代で修理等の賠償金は与えられていない (118)。また「ポグロム」がユダヤ人に原因があるとする冤罪は撤回されるどころか、ナチス時代の売却金を西ドイツマルクに換算して 1 千 3 百 DM の支払いをハンスは請求されたのである⁽¹⁹⁾。このような個人について詳細で具体的な補償について、最近まで公表される機会はなかった。

》第三世代の希望《

作者は長女に洗礼を受けさせていないため「異教徒の子供」と非難され (113) たりするが、多くのユダヤ系家族が素性を明かせないように、ハンスも収容所の入れ墨について話すことができず、80 年代に初めて収容所体

験やゲッターについて子供たちに伝達している (114)。上記ヴェイコウの家族が外見上ではドイツ社会と共存を試み、しかし家庭内では頑なにユダヤ教の伝統に固守し家族全員が収容所の体験をユダヤ民族の拠り所として自覚したのと対比的に、ハンスは、ドイツ人をめとり伝統的な「同化主義」を取ったと言える。そうして家族に沈黙するこの態度は、少数民族として生きる生活の知恵として身についたもので、ハンスの祖先も素性をあからさまに語ることはできず、東方からの逃亡者とだけ語ってきた (139)。しかし社会的風潮からも主人公はユダヤ人に対する人権を強く訴えるようになり、身内に沈黙せざるを得ない心理状態を嘆き始める。

ドイツ社会には三つの世代が存在し、行為者の世代、社会的改革を望んだ68年世代、「事実を探求する第三世代」と作者は信じて、これにユダヤ民族を理解する新世代として心の拠り所としている (139)。

》民族の記憶を残す必要性《

年齢を重ね生活が安定してくるごとに心的抑圧として過去の記憶が、強制収容所体験者を悩ます (127)。70年代にテレビのホロコースト放映には嫌悪感さえ持ち忌み嫌っていたが、「すべてが再び始まった」 (127)と作者は認識して、精神分析医の「行為者と同じく被害者も忌まわしい過去を完了事項として心的に処理してしまいが、それはただ抑圧したに過ぎず数年後にはかならず浮上する」という言葉に救われる (129)。この頃からユダヤ人墓地に憧憬を募らせ、ハンスは避けていたシナゴークへ通う。80年代初頭、かつてのシナゴークに記念碑が建てられ、故郷の唯一の生存者として作者は序幕式に参加するが、簡素な碑文や38年の意味に若者たちが無関心であることに驚愕する (129)。作者の努力で88年に故郷に帰還不可能であった全員のユダヤ人名を明記した記念碑が建てられた (145)。この展開は、ユダヤ人への関心が高まってきた社会的精神風土の証拠といえる。

少数民族としての宿命を担い、民族の「記憶」は自身で保護しなければならないと再認識し、ユダヤ民族の意識を高め流布しようと決心し、作者は86年からユダヤ人共同体に従事し、88年から故郷の近くのユダヤ人墓地とヴェストファーレン州の240ヶ所の消滅しかけているユダヤ人墓地を整備し始める (137)。また80年代半ばにハンブルクの「アウシュビッツ委員会」設立を知り監護委員となり (140)、自身のトラウマの根元であるアウシュビッツを訪問し逆説的にユダヤ人の遺産としてハンスは把握する。

特記すべきことは、少数民族としてドイツ社会でさらに蔑まれた存在のいわゆるジプシーのシンティ・ロマ人に作者が関心を示していることである。43年2月には2万人のシンティ・ロマ人がこれまでの居住地とした第三帝国からアウシュヴィッツ・ビルケナウに輸送され、「ジプシー専用家族収容所」に収容され、残存の3千人が44年8月にガス室で全滅している(144)。この歴史的事実の記録は、ユダヤ人とジプシーの深い交流がこの地域ザウワラントに伝統として存在したことを証明し貴重な資料となっている(143)。

この「伝記」は作者自身の執筆ではなく、社会学、政治学、歴史学の専門家の口述筆記で、大学、研究所等の支援で事実が検証され、当時の法規や語彙の説明、強制収容所の略図付きの「資料集」となっている。

3-3 バルバラ・ホーニヒマン『当時・それから・その後』(1999)

ドイツ語圏で作家として地位を確立したホーニヒマンは、この「自伝的エッセイ」で、「私はアナではない」「ユダヤ女性としての自画像」「ロンドン墓地」「曾祖父・祖父・父そして私自身」「大シナゴークの背後」「セファディンの女友達」「母としての自画像」「ヴィーン没落」「めずらしい一日」と題して自己の存在性を探求している。ここにも、既述の6作品すべてに共通する民族の「アイデンティティ追求と自己確認」が主題となっているが、ユダヤ人の伝統的な生活を批判的に捉えて、そこから未来の展望を見出した作家としてのユダヤ民族の「誇り」が新しい視点といえる。

「社会主義国東ドイツのユダヤ人

『解放・同化・文化の変容』の伝統的概念」

東ベルリン生まれの作者は、隣人から「地上で最とも恩知らずの生き物だ」(6)、「黒い髪の毛と目、濃い眉毛からユダヤ人とばれる」(7)、「汚れたユダヤ人」(9)と罵られている。このような狭量な小市民性は、上記のヴェイコウが体験する旧西ドイツの資本主義社会と同質である。旧東ドイツでは共産・社会主義におけるイデオロギーの共有性から公的には階級のない労働者と農民の社会であり、民族間の差別が存在しないとされた。しかし現状は、古い慣習から離反できず、ユダヤ人を偏見視している。

作者は、日常的な疎外感や、両親がユダヤ性について沈黙していたので、

父母の系譜を探求し、父方の祖先がドイツ社会への「同化」を心願成就した典型的なドイツ系ユダヤ人家系であったと再認識する。既述の中国へ亡命したヘルムート・シュテルンの芸術家の家系と同じく学識経験者のユダヤ系が、ドイツ社会で最上の社会的成功者として特権を得たことになり、この家系に作者は属している。シュテルンの伝記以上にホーニヒマンの家系から、歴史上ドイツ社会へ「解放・同化・文化の変容」を重ね、ドイツ近代国家建設へ貢献した典型的なユダヤ人の生活信条が浮上している。

曾祖父は14歳のときにモーゼス・メンデルスゾーンの聖書訳（1522-34年）でドイツ語を学びながら、プロイセンのユダヤ人解放政策に翻弄されている（40）。多くのユダヤ人たちが「同化」した証として1884年のドイツ革命に荷担しドイツ改革派ユダヤ人同盟を組織して、そのなか曾祖父が中心的役割を担った（41）。曾祖父は作家として雑誌『イスラエル人たち』に寄稿し反ユダヤ主義や保守党への抵抗運動を成し遂げて、法学者としてプロイセン法へ寄与し（41）、「外的、心的において解放の勇猛果敢な先駆者」（42）の追悼を得て祖国ドイツへ忠誠を誓った偉大な「ドイツ人」として称賛された。

祖父は、学術研究に没頭して医学分野ホメオパティの専門医となり、ギーセン大学創立者としての社会的地位を確立し完璧にドイツ人化し、作家活動もする（42）。息子の一人を第一次世界大戦で殉死させている（42）。

さて父は博士号を取得し（43）、既述の『弦が切れる』の作者である音楽家の家族とおなじくドイツ社会で生き抜く術を心得て、社会情勢に機敏に行動し、30年代にドイツからのユダヤ人の中心的亡命地となったロンドンへ逃避し、パリの新聞社を経てロイター通信社・ヨーロッパ局長になり（12）、ロンドンから共産黨員として待望の社会主義国東ドイツへ帰還している（43）。旧東ドイツでは亡命帰還したユダヤ人はユダヤ人の間でも「貴族のような特別」扱いを受けていたという（13）。

このようにドイツ文化が自身の故郷の文化として、これに貢献することこそが社会的地位を得ることだと、三代に渡ってホーニヒマンたちは確信していた（45）。— 作者は、曾祖父はあまりにも華麗な存在であり（50）、祖父についてはドイツに同化しすぎた人物で、父については卑屈すぎるほどにドイツ人化を望み、ユダヤ民族滅亡の具現化だと父を非難している（29）。この父の生活態度から娘は祖国ドイツを離れたと言える。

母はハンガリー出身のヴィーン育ちで他国をめぐる消極的ではあるが国

家社会主義と闘っていたという。父とロンドンで知り合い結婚と離婚を経験して、娘がシュトラスブルグへ移住する同年 84 年 (100) にウィーンに戻りこの地で逝く。母はこのように「ディアスポラ」を繰り返した典型的なユダヤ民族の経歴を持つ。

旧東ドイツでは、ユダヤ国家再建を望むシオニズム主義者とユダヤ人は見なされたため、再建されたユダヤ人共同体から両親は SED (社会主義統一党) の要請で 50 年代に脱退する (14)。つまり両親はドイツ社会で生存するために社会主義の名のもとに伝統的な「同化主義」を繰り返したのである。

しかし娘バルバラは 70 年代に両親への反抗からユダヤ人共同体へ入会する (14)。娘は民族の歴史を証明するユダヤ人墓地ベルリン・ヴァンゼーで、ハインリヒ・ハイネの血を引く一族だと発見して (31/34)、ユダヤ人としての自覚を強め、またロンドンの墓地を訪問し血縁関係で結束したユダヤ民族の存在性を再確認する。—ここに過去・現在・未来を結ぶ糸を紡ぎ、この「自伝的エッセイ」の表題がある。

「ユダヤ民族」

アルザス・シュトラスブルクには、パリに次ぐ規模のシナゴークがあり、この地の 1 万 5 千人のユダヤ人たちは、ドイツと同じく伝統的な職業として家畜業を営みながら (60) フランスへ「同化」した様子がなく、ユダヤ正教や伝統的日常性、例えば安息日サバトを自由に行なっている。住民たちは、ドイツ社会での内的生活と外界を厳格に区別し自家撞着に苦しむユダヤ人と異なり、ユダヤ民族としての存在感を自然に勝ち得ているように作者には映る。

これらの「セファディン」と同じく、同化主義に賛同しないユダヤ人にとって、滞在地は偶然の地であり、「旅・期待・希望・不確実性・差別・記憶・生誕地であり約束の地」(81) であるイスラエルがユダヤ民族を代表する言葉だと作者は再認識する。さらに「属したくないと願ったり、また少なくとも意志に反して属した民族や国民とどのように関わればよいのか。その国家や民族の規律とどのように関連性を築けばよいのか、私たちは考えている (76)」と流浪の民の謙虚さを作者は指摘している。

祖国を拒絶したにもかかわらず、作者は東ドイツの生活を回想し、本質

的には両親と同世代に属しドイツ系ユダヤ人として歴史的宿命を背負わなければならないと自己責任を得て(11)、未来の展望を描き次世代に希望を託して民族間の差別意識から解放されたいと望んでいる。ユダヤ、ドイツ、フランスと三つの文化と関わり根無し草と実感するが(73/76)、女性作家バルバラ・ホーニヒマンはタルムントを引用して「救済の不可思議は記憶だ」(101)と信じ、「自伝的エッセイ」を記述する「作家でありユダヤ人」(17)であることは、民族の歴史である日常性を文学で後世に残すことだと確信して、ドイツ語を母語とした執筆活動を使命としている。またドイツ系ユダヤ人として自覚を持つ瞬間は「反ユダヤ主義についての論争や敢えて民族性を問われたとき」(15/16)であり、同族の共通の要語はそのため「亡命・強制収容所・抵抗運動・ユダヤ民族」となったと作者は主張する(27)。これこそが、上記フランケンタールの信条の根元であり、また迫害を受けたユダヤ人すべての共通意識といえる。この女性作家は、さらにドイツ人とユダヤ人の共生関係について、「アウシュビッツが接点となったためドイツ人とユダヤ人は死においても分かち合えない一対となった。」(16)と断言している。

上記三作品を比較してみると、男性は外的社会的状況に女性は内的家族関係に自己のアイデンティティを追求するという既述の「自伝文学」の特徴がここでも伺える。

さて旧東ドイツにおいてユダヤ人たちは、18世紀以来の「解放・同化・文化の変容」の伝統的概念を宗教的転向にもとづくのではなくてイデオロギーへの賛同として、旧西ドイツ社会より厳格に受容しなければならなかった。その一方、一般東ドイツ市民はユダヤ人問題にまったく無関心であった⁽²⁰⁾。旧ドイツ連邦共和国においては、亡命ドイツ系ユダヤ人の受入体制は不完全であり⁽²¹⁾、強制収容所体験者は上記の例証が示すように故国に歓迎されてはいない。このような状況から統一ドイツにおいて「負の遺産」への一般ドイツ市民たちの「軽視・黙殺」は当然ながら社会的風潮として根強く、この態度が「過去の克服」へ最大の障害となっている。

4 マルティン・ヴァルサーとイグナツ・ブピースの論争

98年後半にドイツ人とユダヤ人の歴史上例がないほどの論争がおり、

あらゆるメディアを巻き込み政治家、文学研究者、作家などが参加している⁽²²⁾。契機となったのが、フランクフルト国際書籍市の最後を飾る 10 月 11 日のドイツ書籍出版販売業主催の平和賞 Friedenspreis des Deutschen Buchhandels を受賞した作家マルティン・ヴァルザーの記念講演である。これに、同年生まれで当時のドイツ・ユダヤ人中央評議会会長であり今では故人となったユダヤ人イグナツ・ブビースが反論したのである。ブビースは妻と共に強制収容所から生き延び、戦後西ドイツへ移住し「ユダヤ人の良心」としてドイツ人の知識人や一般市民からも高く評価された人物であった。

ヴァルザーの演説の論点は、「負の遺産」についてで、最近の政治的・社会的状況から「目を背け wegschauen」、「思考しないこと Wegdenken」(8) も学び取る必要性があると強調したことである。つまりオーストリア人を含めてドイツ人たちに加せられた「制限 Einschränkung」(11) があり、それは「歴史的な重荷 unsere geschichtliche Last」(11) で、一日たりとも避けられない「消去できない汚辱・恥 die unvergängliche Schande」(11) と言われ、ドイツ人たちはそのため「告発された者たち Beschuldigte」(11) という観念から離れらず、その一方でいたるところメディアにおいては、「告発することに熟練 eine Routine des Beschuldigens」(11) したとヴァルザーは言及している。このように全体的に誤解をまねく不明瞭な抽象的な表現を用いて、現在ドイツを代表する作家が、メディアにおいてドイツ人は常に罪の意識を、ドイツの過去について羞恥心を持って告発されている、と不快感を表明したのである。

「強制収容所の非常に残酷な映画の逸話に私は 20 回も目を逸らせた。真剣に受け止めようとしなない者はアウシュヴィッツを否定し、帰責できない者がアウシュヴィッツの戦慄について不当な解釈をしている。過去について毎日メディアで見せつけられれば、この絶えず示される汚辱に私のなかで抵抗が生まれてくる。謝するより、目をそむけ始めた。以前ではありえないことだが、なぜこの 10 年間、これほどまでに多く過去について取り挙げられるのか理解しがたい。抵抗感から、われわれの汚辱をなぜこれほどまでに示すのかその動機を知りたい。それは、思想にもとづくとか忘れるなど訴えているのではなくて、目前の目的のためにこの汚辱を道具化している die Instrumentalisierung unserer Schande と、そう思えば気が楽に

なる(froh)。価値ある目的はかならずあるが、それは道具化した場合がある。(…)アウシュヴィッツは脅迫のためのもの Drohroutine ではなく、どの時代にも適合する萎縮させるための手段でもなく Einschüchterungsmittel、道徳のかたまり Moralkeule でも、または義務を植え付けるもの Pflichtübung でもない。しかしこのように儀式化 Ritualisierung されてしまえば、質を問えば口先だけの祈り Lippengebete となる。

(…) ベルリンのホロコースト慰霊碑についての討論のなかから、後世の者たちは、良心に責任を取ってこれを建立したのだと理解できる。しかしこれは首都の中心地におけるサッカー競技場の大きさのトラウマとしてのコンクリート化だ Betonierung (…) mit Alptraum。恥の記念物化 die Monumentalisierung der Schande だ。」(13-12)

2日後に、ブビースがこれに「心的な放火 geistige Brandstiftung」(36)だと反論している。この間ヴァルザーに賛同するドイツ人たちがメディアで論争を繰り広げて、そうして11月9日、38年のポグロム記念講演でブビースが個々における「理解する begreifen」(107)困難さを指摘しながら、下記のように演説を行った。

「ヴァルザーを非難したことに多くの者たちから私は非難され、ヴァルザーを圧したとか理解していないとか言われている。ヴァルザーは戦後西ドイツを指導してきた作家であり、言葉を持っている ein Mann des Wortes。私のように死にゆく者の発言や論述よりもヴァルザーの方が注目されている。目を背け、思考しないように訓練しなければならないとか、心に押しやるには資格がない Disqualifizierung des Verdrängens とか言っているが、私はこれを理解できない。目を背け、思考しない文化はつまり国家社会主義時代の文化と同じで、私たちが二度と再び習慣にしてはならない文化だ。

ドイツの歴史すべてを考慮しなければならない。ゲーテやビスマルクの映画だけではなく、ナチスの時代も見なければならない。30年戦争や1848年の3月革命の歴史についてもそうだ。ゲーテ、シラー、ベートーベン、ビスマルクの伝記に喜びを感じてはいる。すべてがドイツの歴史の一部だ。これにヒトラーやヒムラーが含まれる。すばらしい歴史だけを探し求め、汚れた歴史の部分を抑圧する、これはできない。この歴史の部分に背を向

け忘却しようとする者にこそ、歴史がまた繰り返される。

あの汚辱は存在したのであり、忘却により消却するものではない。現在の目的のためにアウシュヴィッツを道具化して利用するならば、それは『心的な放火』だ。(…)つまり放火とは右翼を扇動するということだ。ヴァルザーの演説を引用して利用する極右たちがかならず出現する。(…)

アウシュヴィッツの概念は脅迫的なもの、萎縮させる道具、義務を強いるものではない。ヴァルザーが道徳のかたまりと言ったが、ここから道徳を学ぶというなら当を得ているが、かたまりとは不適切な言葉だ。(…)

ホロコースト慰霊碑は(…)トラウマではないし、ましてや汚辱の記念碑化ではない。汚辱そのものが記念碑のよう monumental であった。警告によって初めてこれは記念碑となるのだ。

ヴァルザーの演説から理解できるように、知的な国家主義者が増加して、反ユダヤ主義と思われる者がおり、この者たちから逃れられない。このようなことが『正常 Normalität』と思われがちだ。私にとって『正常』とは、ユダヤ人たちがドイツで再び生活できることであり、連邦共和国において政治的・社会的生活に参加し、現在までドイツの地で存在し得なかった民主主義を持つことだ。(…)

ユダヤ人共同体において子供のころから学んだことは、記憶は歴史の重要な構成要素だということだ。タルムントに『救済の不可思議とは記憶である』と記述されている。(…)

ショアの犠牲者を忘れてはならない義務があり、この犠牲を忘れる者は、再度これらの犠牲者を殺害することになる。」(111-113)

ブビースの抗議には、既述した7人のユダヤ人作者の真情が率直に反映している。—ブビースと同世代で強収容所体験者のコルデーリア・エードヴァルドソンやルート・クリューガーは伴に強制収容所テレージエンシュタットでユダヤ民族としての自覚を勝ち得て、ホロコーストを代表する「アウシュヴィッツ」を逆説的に容認している。ヘルムート・シュテルンは、第三帝国から過酷な亡命生活を強いられた。ドイツ社会で精神の安定を得ることのないペーター・フィンケルグリューエンとディアスポラを繰り返したといえるローラ・ヴェイコウの存在は、ユダヤ民族を象徴している。収容所体験者のハンス・フランケンタールは旧西ドイツ社会において記憶を溯りながら、ユダヤ民族としての義務と課題を再確認して》曖昧な非ナ

チス化《を非難し》補償問題《を訴え、統一ドイツにおいては》第三世代《に希望を託しユダヤ人としての》記憶を残す《ために「アウシュヴィッツ」の存在を保護することに使命感を持つ。またバーバラ・ホーニヒマンの父方の祖先たちは、生活基盤を築くために隠忍自重の生ざまを自らに強いて、近代ドイツ国家建設に貢献してきた。

さて98年12月14日に「フランクフルター・アルゲマイネ紙」の編集者フランク・シルマッハーとザーロモン・コルンの主催で両者の対話がなされ、これはドイツ全土にテレビ放映されている。しかし二人の見解の相違は最後まで平行線をたどる。

ヴァルザーの演説の不明瞭な箇所「目前の目的のためにこの汚辱を道具化している」とは、当時の強制労働に対する補償問題やアリア人化された歴史的差別の諸問題に頻繁に「アウシュヴィッツ」という言葉が利用されてきたという意味であり、これをブビースは否定し、このような著名な作家の言葉による若い世代への影響力を懸念し、ホロコーストに対してドイツ国民全体の集団的 *kollektiv* 自覚と責任を訴えた (457)。

一方ヴァルザーは個々の体験や「言葉の使用 *Sprachgebrauch*」(454)の相違や「良心の個人差 *persönliches Gewissen/ unser Gewissen ist unser Gewissen/ mein Gewissen bleibt mein Gewissen*」(449)など個人的基準に従ってホロコーストを理解する必要性を強調し正面から対立し、さらにはブビースの登場は、絶えず33年を追想させる姿勢がありナチスの過去と結びついてくる、とこのユダヤ人の存在性にまでドイツ人作家は嫌悪感を示したのである (452)。

さらにヴァルザーは、「ドイツ人の沈黙している大多数 *die Mehrheit der Deutschen/ die schweigende Mehrheit*」(461)とユダヤ人との間の誤解を回避するために、「新しい言葉 *eine neue Sprache*」(462)を見出さなければならないと言う。これに対して「共通の記憶 *ein gemeinsames Erinnern*」(461)こそ重要であり、両者のそれを再確認しなければならないとドイツ・ユダヤ人中央評議会会長は反論を重ねている。このユダヤ人側の「共通の記憶」とは「アウシュヴィッツ」という歴史的事実であり、上記バルバラ・ホーニヒマンが強調している「アウシュヴィッツが接点となったため、ドイツ人とユダヤ人は死においても分かち合えない一対となった」という言葉に凝縮されているのである。

ところが「公共の場で他者に門戸を開いたから『心的放火』という言葉を取り下げる」(464)とブビースが二度申し出てこの論争に一応の幕が下りた。ブビースのこの妥協的態度は、18世紀以来ドイツ系ユダヤ人として祖先たちがドイツ社会で存在性を確保しようとした「共生・同化融合」の典型的な姿勢ととれる。しかしながらこの論争以来、ドイツ人側からユダヤ人たちと新たな関係を築く数々の試みがなされている。これこそが、ブビースの意図するところなのである。

さてここで取り扱った7作品の自伝文学は文学的手法から、コルデーリア・エードヴァルドソンの小説、ルート・クリューガーの告白録、ヘルムート・シュテルンの伝統的伝記、ペーター・フィンケルグリューエンの推理小説的自己探求証言集、ローラ・ヴェィコウの小説としての生活記録集、ハンス・フランケンタールの口述筆記による資料集、バルバラ・ホーニヒマンの自伝的エッセイと大別することができ、また特殊な内容と形式面から既述したように「新しい文学」が誕生したと言える。

ところで、50年代末から60年代に自身もユダヤ人であるT. W. アドルノが「ドイツの過去」への責任をS. フロイトの「群集心理 Massenpsychologie」における精神分析学を用いて「ドイツの集団的羞恥 eine deutsche Kollektivschuld」を主題として論証を試み、68年世代に歓迎され流布している。その反面「アウシュビッツ以来、文学を取り扱うことは野蛮なことだ」とアドルノが記したように、旧西ドイツ文芸界では「ユダヤ人文学」が廃れてしまった⁽²³⁾。しかしこの10年間、あらゆる学術分野で盛んにユダヤイカ Judaica が注目され、このように自伝文学が出版され、ドイツ系ユダヤ人の真情を知る機会にドイツ市民は恵まれている。それにもかかわらず上記のように激しい論争がドイツ社会で繰り広げられて、この論争でブビースも指摘しているように相互に「理解する」困難さがあり、そこには「認識」の相違が明らかになった。

さてこの相違は歴史的に反復されており、「認識」の本質を知るためにしばしば引用されてきたヘーゲルの著名な言葉がここでも生きづくだろう⁽²⁴⁾。

「周知の事とは Das Bekannte、それが知られている bekannt からであり、認識されている erkannt わけではない。認識する場合、すでに知られ

ている事として取り扱ったり、これでよいと思わせることは、他者の錯覚 Täuschung anderer と同じく、最も習慣的な自己欺瞞 Selbsttäuschung だ。多方面で議論を重ねても、どのように事態が起こったかを知らなければ、その知識 Wissen には発展性がない。」

さらにこのヘーゲルの引用を多分に用いて独自の叙事的演劇論を確立して、その実践的手法「異化効果」で事実を認識させようとしたベルトルト・ブレヒトの言葉がある⁽²⁵⁾。

「芸術とは、本来理解できないこと das unbegreifliche を作品化することだ。芸術は（感情的に共感を得ながら）当然のものとして als selbstverständlich、あるいは理解不可能なこととして als unbegreiflich 作品にされたものではなく、まだ理解できていない nicht begriffen が、理解できることとして als begreiflich 作品化すべきだ。」

ヘーゲルの言葉「周知の事」を「アウシュヴィッツ」とすれば、ヴァルザーを含めた一般ドイツ市民における「負の遺産」についての「認識」過程を推し量ることができ、ブレヒトの引用「芸術」を「ドイツ系ユダヤ人の自伝文学」に置き換えれば、この自伝文学の意義が一層明確になる。

註 （番号は「ドイツ系ユダヤ人の自伝文学 1」から続く。）

(16) 使用した作品群。これらの邦訳はない。

3-1 Laura Waco 『Von Zuhause wird nichts erzählt. Eine jüdische Geschichte aus Deutschland』(1996) Peter Kirchheim 出版社 (ミュンヘン)。

作者経歴：47年生まれ。国外移住を考慮してロンドンのカレッジへ入学。18歳でカナダへ移住。68年以来弁護士の夫と共にカルフォルニア在住。

3-2 Hans Frankenthal 『Verweigerte Rückkehr. Erfahrungen nach dem Judenmord』(1999) Andreas Plake, Babette Quinkert, Florian Schmaltz 編集。Fischer Taschenbuch 出版社 (フランクフルト/M.)。

作者経歴：26年に生まれる。アウシュヴィッツ・モノヴィッツとミッテルバウードラの収容所で強制労働に従事。連合軍の攻撃を恐れたナチスによって、45年ドイツ無条件降伏5ヶ月前に移動させられたテレージエンシュタット強制収容所でソ連赤軍派に

解放される。現在ドイツ・ユダヤ人中央評議会会員であり、アウシュヴィッツ保存委員会の副会長。

3-3 Barbara Honigmann 『Damals, dann und danach』 (1999) Carl Hanser 出版社 (ミュンヘン・ウィーン)。

作者経歴：49年に生まれる。舞台監督や脚本家から作家であり画家として活躍。84年フランクフルト/M.を経てシュトラースブルクへ夫と子供と移住。ドイツ海外ペンクラブ会員。94年ニコラス・ボルン賞、2000年にクライスト賞を受賞。父についてのエッセイ『無からの愛 Eine Liebe aus nichts』 (1993)、絵画とテキスト『ユダヤ人女性としての自画像 Selbstporträt als Jüdin』 (1992)、旅行記『サハラ Sahara』 (1996)、エッセイ『すべてが愛情 Alles alles Liebe』 (2000) などの作品がある。

(17) 母は家庭内において絶対的な権限を持つ。Rachel Monika Herweg 『Die jüdische Mutter. Das verborgene Matriarchat』 (1994) wissenschaftliche Buchhandlung 出版社 (ダルムシュタット)、8頁および註(12)参照。

(18) 53年に旧東ドイツ全土でSEDの政策に抗議して暴動が起こり、当時はベルリンの壁建設(61年)前で、東ドイツ市民に西ベルリン市民が連帯しドイツ全土へ拡大した。この蜂起はソ連兵に鎮圧されたが、当時のコンラート・アデナウアー連邦首相が東ドイツの犠牲者を弔う追悼を『全ドイツ国民のための宣誓』として「ドイツ統一」の必要性を訴えた。ここから6月17日を例えばバイエルン州などでは「ドイツ統一の日」と名づけて重要視していた。Hartwig Bögeholz 『Die Deutschen nach dem Krieg. Eine Chronik. Befreit, geteilt, vereint: Deutschland 1945 bis 1995』 (1995) Rowohlt 出版社 (ラインベック)。162/164/166頁参照。

(19) ドイツ連邦共和国は戦後補償問題を積極的に解決してきたといわれるが、ユダヤ人に対する実状は上記フランケンタールの経験が示しており、外国人を含めた強制労働の補償が特に留保された。連邦選挙時の公約に従い社会民主党と90年連合・緑の党による連立内閣の提唱で、2000年7月にドイツ企業が主力となり、「記憶・責任・未来 Erinnerung Verantwortung Zukunft」という基金が設立され2001年3月に拠出が完了されたと言われている。矢野久『ドイツ「記憶・責任・未来」基金の歴史的意義』、雑誌『世界』2000年12月号第682号の「特集 戦時 性暴力—市民による審判へ」の139-145頁、および2001年3月15日付朝日新聞朝刊参照。なおドイツ・カトリック教会はナチス政権時代に教会で強制労働させられた被害者に補償金を支払っている。2000年3月7日付朝日新聞朝刊参照。

(20) Karin Hartewig 『Zurückgekehrt. Die Geschichte der jüdischen Kommunisten in der DDR』 (2000) Bohlau 出版社 (ケルン・ヴァイマル・ウィーン)。この646頁におよぶ著書には、SEDの政策で社会主義に組み込まれたユダヤ人の実態が浮きぼりにされている。特に第3章『ユダヤ人不在の反ファシズム? DDRの集団的記憶力と消えゆく少数派の統合 Antifaschismus ohne Juden? Das kollektive Gedächtnis der

DDR und die Integration einer schwindenden Minderheit』431-525 頁参照。

(21) 西ドイツの場合には亡命者を受け入れる居場所がなく、ドイツ系ユダヤ人だけではなく亡命ドイツ人作家、例えばトーマス・マンにおいても西ドイツ帰還は困難な状況にあった。Jost Hermand, Wingand Lange 編纂『Wollt ihr Thomas Mann wiederhaben? Deutschland und die Emigranten』(1999) Europäische Verlagsanstalt (ハンプルク) 参照。なお拙論『ドイツ系ユダヤ人の文学—「解放」「同化」「文化の変容」を経て—』16-18 頁参照。日本独文学界研究叢書 005、日本独文学会、西谷頼子編『喪失をめぐって—1989 年以降のドイツ文学(2)』(2001 年) に所収。

(22) Frank Schirrmacher『Die Walser-Bubis-Debatte. Eine Dokumentation』(1999)、Suhrkamp 出版社(フランクフルト/M.) 参照。680 頁以上におよぶこの著書のなかに一般読者の反応も含めた論争のすべてが詳細に記録として収集されている。

—— Ignatz Bubis (1927-1999) 現在のポーランドで生まれる。父と兄弟姉妹を強制収容所で失い、宝石商から不動産業を営む。収容所体験者でありドイツ・ユダヤ人中央評議会設立に貢献して会長となり、ドイツ人から尊敬された Heinz Galinski (1912-92) の後継者がブービースであった。なお 1985 年映画監督で脚本家のライナー・ヴェアナー・ファスビンダーの戯曲『ごみ、市、そして死』の上演をめぐって、主人公とブービースの経歴が酷似しており、全面にユダヤ人蔑視の傾向があるとしてブービースが激しく抗議し上演中止に追い込んでいる。Rainer Werner Fassbinder『Der Müll, die Stadt und der Tod Sämtliche Stücke/Rainer Werner Fassbinder』(1991) Autoren 出版社(フランクフルト/M.) 参照。

—— Martin Walser (1927-) 50 年代から作家活動を開始、数々の文学賞を受賞。98 年に小さな村の存在性と第三帝国時代の幼年期からの成長過程を 3 つの井戸に象徴させ、例えば母が家族の存続のためナチス党员となった事実など詳細に描写された『湧き出る井戸 Ein springender Brunnen』(Suhrkamp 出版社) を発表している。この小説は自伝的要素が非常に色濃いと言われている。なおヴァルザーは、上記ハンス・フランケンタールも証言者として出廷した 63-65 年に行われたアウシュヴィッツ強制収容所職員に対するフランクフルト裁判を契機として『我々のアウシュヴィッツ Unser Auschwitz』を Hans Magnus Enzensberger 編集、雑誌『Kursbuch』(1965 年 6 月号、189-200 頁) に掲載している。ここのドイツの過去への見解は、ほとんど上記 98 年の演説や論争における意見と同じである(特に 179-199 頁参照)。

(23) T. W. Adorno『Was bedeutet: Aufarbeitung der Vergangenheit』(1959)、Suhrkamp 出版社 Gesammelte Schriften(1977)、Bd. 10. 2、556 頁および『Erziehung nach Auschwitz』同上 576 頁参照。ここには S. Freud の『Das Unbehagen der Kultur』(1929/30) および『Massenpsychologie und Ich-Analyse』(1921) が引用されている。

(24) G. W. F. Hegel『Phänomenologie des Geistes』(1807) Suhrkamp 出版社、Werke

in 20 Bänden (1974) Bd. 3、35 頁参照。

- (25) Bertolt Brecht 『Über alte und neue Kunst. 1920 bis 1933』 Suhrkamp 出版社
Gesammelte Werke (1967)、Bd. 18、22 頁参照。

Die autobiographische Literatur von deutschstämmigen Juden II

Die unbewältigte Vergangenheit und der Vorbehalt der Schuld

Yoriko Nishitani

Dieser Beitrag ist der dritte Teil zur autobiographischen Literatur deutschstämmiger Juden. Zwei Themen sind schon behandelt worden: einmal die Zeugenaussagen von Frauen und zum anderen die von Männern, die die Zeit des Dritten Reiches im Konzentrationslager oder im Exil überleben konnten. Dieser Beitrag handelt von der Lebensführung der deutschstämmigen Juden, die als Überlebende des Holocaust oder als deren Nachkommen in den beiden Teilen Deutschlands und in der neuen Bundesrepublik ihre spezifischen Probleme zu lösen versuchten und versuchen.

Durch diese dreiteilige Untersuchung möchte ich die gegenwärtigen Konflikte zwischen den deutschstämmigen Juden und den Deutschen ans Licht bringen. Ein Beispiel dafür ist die Aufsehen erregende Debatte zwischen dem damaligen Vorsitzenden des Zentralrats der Juden in Deutschland und einem der repräsentativen Schriftsteller der deutschen Gegenwartsliteratur 1998, die in allen Medien starke Beachtung fand.

3. Die unbewältigte Vergangenheit und der Vorbehalt der Schuld

Die behandelten Prosawerke sind:

- Laura Waco (1947 geboren): Von Zuhause wird nichts erzählt. Eine jüdische Geschichte aus Deutschland (1996)
- Hans Frankenthal (1926 geboren): Verweigerte Rückkehr. Erfahrungen nach dem Judenmord (1999)
- Barbara Honigmann (1949 geboren): Damals, dann und danach (1999)

Laura Waco beschreibt ihr Leben bis zum achtzehnten Lebensjahr mit den Eltern, Überlebenden des Holocaust, und ihren zwei jüngeren Schwestern in der alten Bundesrepublik. In der Familie werden die grausamen Erfahrungen des Holocaust wiederholt offen erzählt und die Eltern wahren streng die jüdische Tradition, so dass die Protagonistin, Ich-Erzählerin, mit den elterlichen Prinzipien eng verknüpft ist: Sie durfte nichts von zu Hause draußen erzählen, was zum Titel geworden ist.

Die typische Schulerziehung der 60er Jahre verursacht in ihr innere Konflikte. Sie lässt sich durch das Verhalten ihres Lehrers, der noch unter dem Einfluss des Nationalsozialismus steht und dessen Innenpolitik zum Teil gutheißt, entmutigen. Ihre Religion wird auch nicht geachtet. Somit wird ihr Bild von Juden immer negativer: „Jude ist ein gelber Stern auf einer zerrissenen Jacke“ wie „eine Beschmutzung“ „und etwas Erniedrigendes“. Aus dieser beunruhigenden und unsicheren Situation des Lebens als Juden in Westdeutschland heraus entschied sich diese Familie, die traditionelle Diaspora zu wiederholen.

Im ersten Kapitel der Lebensbeschreibung Hans Frankenthals ist die starke Verknüpfung mit seiner Heimat, Schmollenberg/Sauerland, dargestellt, wie sehr seine jüdischen Vorfahren seit 1880 versucht hatten, ihre Existenz als „Deutsche“ sicher zu stellen und wie schmerzhaft es für seine Eltern, Hans und seinen älteren Bruder war, zusammen in ein Konzentrationslager deportiert zu werden. Seine Beschreibung der Zwangsarbeit der jüdischen Jugendlichen vor der Deportation im Dritten Reich gilt jetzt als ein wichtiges Zeitdokument, da diesen Details bisher wenig Beachtung geschenkt wurde.

In der Nachkriegszeit musste er sich als Heimgekehrter, der zum Deutschen werden wollte, sein Judentum zu Bewusstsein bringen, weil er von seinen Landsleuten, die sich kaum für die deutsche Vergangenheit interessierten, bitter enttäuscht wurde. Sie versuchten sogar die neuentdeckte Wahrheit über Verleumdungen im Dritten Reich unbeachtet zu lassen. Diese Enttäuschung von Hans Frankenthal lässt sich im wesentlichen auf die selben Erfahrungen zurückführen, die auch Laura

Waco gemacht hat, die zu der auf den Holocaust folgenden Generation gehört, aber trotzdem nicht in Deutschland bleiben konnte.

Er, der in seiner Heimat nicht begrüßt worden ist, wird zum Mitglied des Auschwitz-Komitees in Hamburg, um seine eigenen schwächer werdenden Erinnerungen an die KZs aufzufrischen und "Auschwitz" zum Sinnbild der Vergangenheit Deutschlands zu machen. Er engagiert sich auch in seinem Bundesland für die Kontrolle und Überwachung der jüdischen Friedhöfe, die bereits verschwunden sind oder durch Vernachlässigung verwahrlosten.

Durch seine Tätigkeit für »die Bewahrung der jüdischen Geschichte« aktiviert, beanstandet der Verfasser »die unvollständige Entnazifizierung« seit dem Kriegsende und »die unvollendete Entschädigung«, während er auf »die dritte Generation« hofft, die die Diskriminierung gegen die Juden bekämpft und die gleichberechtigte Symbiose mit den Deutschen aufbauen will.

Barbara Honigmann beabsichtigt mit ihrer Familiengeschichte von drei Generationen väterlicherseits den typischen traditionellen Weg von der "Emanzipation, Assimilation und Akkulturation" der deutschstämmigen Juden sowohl historisch als auch in der DDR aufzuzeigen. In der DDR konnten sie sich nicht wie früher auf ihre Religion besinnen, sondern mussten sich ideologisch zum Kommunismus bekehren. Ihre Eltern waren in der Hoffnung auf das sozialistische Deutschland aus dem Exil zurückgekehrt. Aber ihre Tochter geht gegen die Tradition der jüdischen Assimilation aus dem Elternhaus mit ihrer eigenen Familie über Frankfurt/M. nach Straßburg im Elsass .

Im Kontakt mit ihren dort ungebunden lebenden sefardischen Freundinnen hat die in Ostberlin geborene Verfasserin ein Bewusstsein als deutschstämmige Jüdin entwickeln können. Sie glaubt, dass es ihre soziale und kulturelle Verantwortung sei, durch ihre schriftstellerische Tätigkeit auf Deutsch als ihre Muttersprache ihre Lebensgeschichte und Betrachtungen über ihr Umfeld literarisch zu formulieren und diese dem jüdischen Volk zu hinterlassen. Sie ist von der vererbten schriftstellerischen Fähigkeit väterlicherseits und der Blutsverwandtschaft

mit dem Schriftsteller Heinrich Heine überzeugt.

Barbara Honigmann, die noch zur Generation ihrer Eltern “in Aschkenas” zu gehören glaubt, äußert sich über die deutsch-jüdische Symbiose wie folgt: “dieses Nicht-voneinander-loskommen-Können, weil die Deutschen und die Juden in Auschwitz ein Paar geworden sind, das auch der Tod nicht mehr trennt.” Die Schriftstellerin hat in ihrem Werk die Notwendigkeit zur Hoffnung auf die nächste Generation verdeutlicht, wie Hans Frankenthal.

4. Die Debatte zwischen Ignaz Bubis und Martin Walser

Der schwerste Konflikt zwischen den deutschstämmigen Juden und den Deutschen in der gegenwärtigen Gesellschaft existiert bei den unterschiedlichen Ansichten, inwieweit die Wirklichkeit des Holocaust jeweils ins Bewusstsein zu bringen ist. Dieses Wahrnehmungsproblem ergibt sich deutlich aus der Debatte zwischen Ignaz Bubis (1927-99) und Martin Walser (1927-). Der Anlass dafür war die Sonntagsrede dieses Schriftstellers zum Friedenspreis des Deutschen Buchhandels 1998.

Martin Walser behauptete Folgendes. Man müsse sich in Bezug auf die “deutsche Vergangenheit”, die in den letzten Dekaden so oft in den Medien als die “unvergängliche Schande” bezeichnet wurde, das “Wegdenken daran und Wegschauen” zu eigen machen. Deutsche wie Österreicher seien ausreichend zu den “Beschuldigten” gemacht worden und dazu gezwungen, tagaus tagein “Auschwitz” nicht zu vergessen. Andererseits sei dieses Verfahren der Medien selbst zu “einer Routine des Beschuldigens” geworden. Der Schriftsteller betonte, dass die geschichtliche Last mit dem “persönlichen Gewissen” zu verstehen sei.

Seine Worte wie “die Instrumentalisierung unserer Schande”, “Droh-routine”, “Einschüchterungsmittel”, “Moralkeule” oder “Lippengebete” wurden zu den Schlagworten der Debatte. Zugleich sind seine Ansichten zum Holocaustdenkmal in Berlin, wie “die Betonierung des Zentrums der Hauptstadt mit einem fußballfeldgroßen Alptraum” oder “Monumentalisierung der Schande”, zum Brennpunkt dieses Streits

geworden.

Ignaz Bubis kritisierte Martin Walser heftig ; sein Verhalten sei “geistige Brandstiftung” und er ein “geistiger Brandstifter”, so dass sowohl Rechtsradikale immer stärker wie auch die Judenverfolgung häufiger werden könnte. Er meinte, dass alle Deutsche kollektiv die Schuld an der deutschen Vergangenheit hätten und die gemeinsamen Erinnerungen anerkennen müssten, was er auf die Lehre des Talmud bezieht : “Das Geheimnis der Erlösung ist die Erinnerung.” Dies drückt genau die Haltung zum Holocaust aus, auf der Barbara Honigmann die wahre Symbiose mit den Deutschen aufbauen möchte und bei der die oben genannten anderen Autorinnen und Autoren ihre Identität als Juden in der jeweiligen Lebensgeschichte literarisch feststellen.

Dieser Streit kam aber völlig unerwartet zum Schluss, als Ignaz Bubis sein Wort vom “Brandstifter” zurückzog. Durch diese Debatte konnte er das öffentliche Bewusstsein für den jüdischen Widerspruch wecken, und er glaubte, dass dies ein großer Erfolg sei.

In der letzten Dekade ist man in der Bundesrepublik auf Judaica sehr aufmerksam geworden, und es hat viele Gelegenheiten gegeben, das jüdische Volk zu verstehen und die neue gleichberechtigte Symbiose mit ihm aufzubauen. Aber diese Debatte ist unausweichlich entstanden. Hier geht es um die jeweiligen Erkennungsunterschiede zwischen der Mehrheit und den marginalen Gruppen wie seit alters. Dafür kann man Hegels Begriff von der Erkenntnisteknik der Wirklichkeit zur Hilfe nehmen, um diese Diskrepanz aufzuklären, und auch der Brechtsche Begriff von der “Verfremdung” lässt sich geltend machen, um die Bedeutung der autobiographischen Literatur von deutschstämmigen Juden für die deutsche Gesellschaft hervorzuheben.